



研究調査報告

フィリピンの神社跡地調査報告

稲宮 康人

(非文字資料研究センター 研究協力者)

調査概略

神奈川大学非文字資料研究センターの「海外神社跡地のその後」研究班は2016年2月10日から17日まで、フィリピンの神社跡地調査を行った。調査の目的は、神社が建っていた場所の確定及び跡地調査、また当時を知る人がいれば神社について聞き取りを行うことである。現地調査を行ったのは、中島三千男、小熊誠、小熊君秋、稲宮康人の4人である。今までフィリピンの神社については全くの不明であったが、今回の調査によって、フィリピンでも神社が創建されてきたことが判明した。

比島神社跡 マニラ市

調査日 2016年2月11日

フィリピンの首都マニラには、比島神社があった。



図1
戦時中の
マニラ市街地図
(赤矢印が
神社の場所)

神社があった場所はフィリピン大学のホセ先生に案内していただいた。『マニラ案内』⁽¹⁾の市内地図(図1)でも確認することができる。比島神社があった場所には、比日友好センターのビルが建ち、日本語学校として使われている(図2)。ビルの一階には、このビルを建てた



図2 比島神社跡地

経緯を記したプレートがあり、神社があったことも書かれていた。神社の痕跡は全くない。

神社は「狂信に近い信神家がゐて、出雲の大社を分座して貰って、個人でこれを建立した」「田舎の荒神様か、稲荷様位な小さな祠だ」「表には型ばかりの鳥居が立つ



図3 比島神社

てをる」という様子であった⁽²⁾。比島神社の写真(図3)には「昭和五年十一月吉日」と書かれた幟があり、それ

以前に建てられたことがわかる。

戦後、比島神社は敵資産として米軍に接収され⁽³⁾、フィリピン政府の管理下にあった。神社がいつまであったのかは不明だが、昭和 32 年、米国司法省外国財産事務所から在比日本大使館に、フィリピン神社跡地の賃貸料として 300 ペソ (5 万 4 千円) が返還されている。1972 年、神社跡地を不法占拠していた住民を排除し、仮設建造物を建設。92 年には日本のフィリピン協会と共に比日関係を促進するためのビルを建てることとし、96 年には比日友好センター (Philippines-Japan Friendship Center-Manila) が完成した。それが現在の建物 (図 2) である。

神明神社跡 バギオ市

調査日 2016 年 2 月 13 日

バギオには、軍病院が建てた神明神社があった (図 4)。



図 4 分院地図。見取図という字の上に神明神社とある。

神明神社は最高裁判所が管理する土地の裏手にある測候所のあたりに建っていた。特に何も残っておらず、測候所の人に神社について聞いてみたが何も知らなかった。

バギオはルソン島北部の山中に避暑地として開発された街である。アメリカ植民地政府が夏の間だけ政府機能を移す「夏の首都」でもあった。山岳地帯を通りバギオへと向かうベンゲット道路 (現・ケノン道路) は難工事で知られ、多くの日本人労働者が工事に従事したが、その役割は過剰に宣伝され、美談として語られていた。

昭和 18 年 3 月、バギオのガバメントセンターに第



図 5 バギオ 神明神社跡

七十四兵站病院分院⁽⁴⁾が開設された。分院長である室井大尉が中心になり、神明神社を創建した。昭和 18 年の夏頃、入院していた軽傷患者の中から宮大工や鍛冶屋、鳶などが選ばれ、神明山と名付けられた分院の裏山に昭和 19 年 3 月 8 日「社殿・石垣・柵・表参道・裏参道・一の鳥居から三の鳥居まで有する神社」が完成した。同日深夜には御神体である伊勢神宮の「みたま」を迎え、



図 6 神明神社鎮座祭

鎮座祭を行った (図 6)。翌日、神社創建を祝う祭りをひらき、子供たちによる神輿仮装行列、患者や衛生兵による奉納相撲なども行われた。バギオ市内にはそれまで神社がなかったので、市内に住む多くの邦人は神社創建を非常に喜んだ⁽⁵⁾。1945 年 1 月 23 日米軍のバギオ空襲で分院が爆撃され、神社も焼失した。



バヤバス大和神社跡 ダバオ市

調査日 2016年2月15日

ダバオ郊外バヤバス地区の吉田山山頂にバヤバス大和神社があった（図7）。現地日系人会に紹介していた



図7 バヤバス大和神社

だいた日系二世の田中愛子さんの証言と案内によって、跡地を訪問することができた。遠くにダバオ湾を望む、風光明媚な場所だった。神社が建っていた場所は、有力者の別荘となっていたが、現在は廃墟となっている（図8）。山頂には何本か古い木が立っており、それらは神社時代に植えられたものかもしれない。山頂から少し



図8 バヤバス大和神社跡地

下った場所に、山下財宝を探す人が掘ったとおぼしき大きな穴があり、埋もれていたコンクリート製の神社の階段が地表に顔を出していた。

神社はバヤバス拓殖の社長だった吉田円蔵が建立した。吉田円蔵は明治36年にベンゲット移民として渡比



図9 児島正治『強いられた冒険：ドリアンの島にて9歳までの記憶』文芸社 2018

し、明治38年にダバオに入植した。ダバオ奥地を切り拓きバヤバス一帯に2000haの耕地を所持する農事会社バヤバス拓殖をつくりあげた。開拓地の中にある小高い丘を吉田山と名付け、周囲に吉田遊園地をつくり、山頂には神社を創建した。

ミンタル稲荷神社跡 ダバオ市

調査日 2016年2月16日

ダバオ郊外のミンタルにミンタル稲荷があった（図10）。今も小学校構内に残る太田恭三郎記念碑の裏手、水路を挟んで反対側に神社はあった。当時の地図⁶⁾（図11）や、現地の方の案内で神社があったおおよその場



図10 ミンタル稲荷



図 11 ミンタル地図



図 12 ミンタル稲荷跡地

所を確定したが、正確な位置はわからなかった。遺構は残っておらず、住宅や、鶏を飼育する場所として使われている（図 12）。跡地と考えられる土地の一角には穴が掘っており、山下奉文の財宝⁽⁷⁾を探す人が掘ったものだ、ということであった。

ダバオ市郊外ミンタルは太田興業の拠点であり、太田興業の許可なく建物を建てることができないほどであった。ミンタル稲荷が正木吉衛門重役⁽⁸⁾によって昭和 6 年 11 月に伏見の稲荷大社（倉稲魂命、猿田彦命、大宮女命）の分神を祀り、創建された。正式名称は南伏見稲荷大神。当時の様子は「稲荷神社はゴルフ場の奥にあり、風通しのよい社殿が芝生の中に建っていました。ゴルフ場の中に参道があり、赤い鳥居が並んでいました。社殿の裏側は崖で眼下にタロモ川が流れていました。米軍の迎撃に社殿の裏側に洞窟を掘り、徹底的な抵抗に米軍の攻撃で稲荷神社も爆破されてしまいました。」とつづられている⁽⁹⁾。

当時、ダバオ市内には東西本願寺、開南禅寺、日本

キリスト教会、天理教会などの宗教施設があり、稲荷神社の神主は天理教会の人が勤めていた⁽¹⁰⁾。

まとめ

戦前の東南アジアには神社はほとんど建てられていなかった。他の植民地・占領地と違い東南アジアは他の欧米諸国の植民地であり、日本人の宗教施設を建てることは簡単ではなかった。海外神社調査の基本文献ともいえる佐藤弘毅の海外神社一覧でも東南アジアの神社はわずか 7 社しか書かれていない。戦前からあったものとしては、タイ・アユタヤの長政神社と、シンガポールの新嘉坡大神宮（後の照南神社）、占領中に建てたシンガポールの昭南神社が知られている。しかし、他の地域の神社についてはわかっていない。今回は 4 社の跡地を確認することができたが、フィリピンに神社をもっと作っていた可能性は高いと思われる。戦前の神社を考えるうえで、東南アジアの神社も視野に入れ、全貌を明らかにすることが必要と思う。

【注】

- (1) マニラ新聞社編集局『マニラ案内』マニラ新聞社、1943
- (2) 神社には昭憲皇太后の木像も安置されていた。木村毅『マニラ紀行南の真珠』全国書房、1942
- (3) 「去月七日、に在比日本国大使館に対し米国司法省外国財産事務所から、本願寺教会 五四八三・三六ペソ（九万七千余円） フィリピン神社・日本慈善局 三〇〇ペソ（五万四千円）の賃貸料を代理受領してほしいと小切手をつけて申出があった。」「この賃貸料は、米軍による比国奪還直後、在比日本宗教団体所有に係る財産を米陸軍敵産管理班が接収管理し、その賃貸料積立て、その後米国司法省外国財産管理フィリピン事務所に移管されてゐたもので」『神社新報』1957 年 7 月 13 日
- (4) 穴倉公郎『続・イフガオの墓標』育英印刷興業、1980
宇都宮陸軍病院から派遣された軍医少佐神山信雄率いる部隊は、1943（昭和 18）年 3 月 29 日バギオに到着し、テイチャーズキャンプの既設療養所（南方第十二陸軍病院分院）を引き継いで、第七十四兵站病院を開設した。3 月 30 日には、ガバメントセンターに軍医大尉室井正礼を分院長とした分院を開設した。病院にはガダルカナル・ニューギニア方面の患者を収容し、多いときは 4 千 6 百名にもなった。昭和 20 年初頭には米軍による空襲が始まり、1 月 23 日には B29 の大空襲によって分院は本部の建物を残して全壊した。戦況の悪化により、病院は 4 月頃にはバギオから撤退している。
- (5) 穴倉公郎『イフガオの墓標』育英印刷興業、1975、神山信雄「病院の自活体制と患者の鍊成」『続・イフガオの墓標』
- (6) ダバオ会編『ダバオ 懐かしの写真集』ダバオ会編集部、1988
- (7) 日本に関わる場所に行くと、必ずと言っていいほど山下財宝の話が出てきた。太田恭三郎記念碑も財宝探しが一部を壊したと聞いた。大野拓司、寺田勇文編『現代フィリピンを知るための 61 章【第 2 版】』明石書店、2009
- (8) ダバオ会編『戦禍に消えたダバオ開拓移民とマニラ麻』ダバオ会、1993
- (9) ダバオ会編『ダバオ 懐かしの写真集』1988
- (10) ダバオ会編『ダバオ 懐かしの写真集』1988